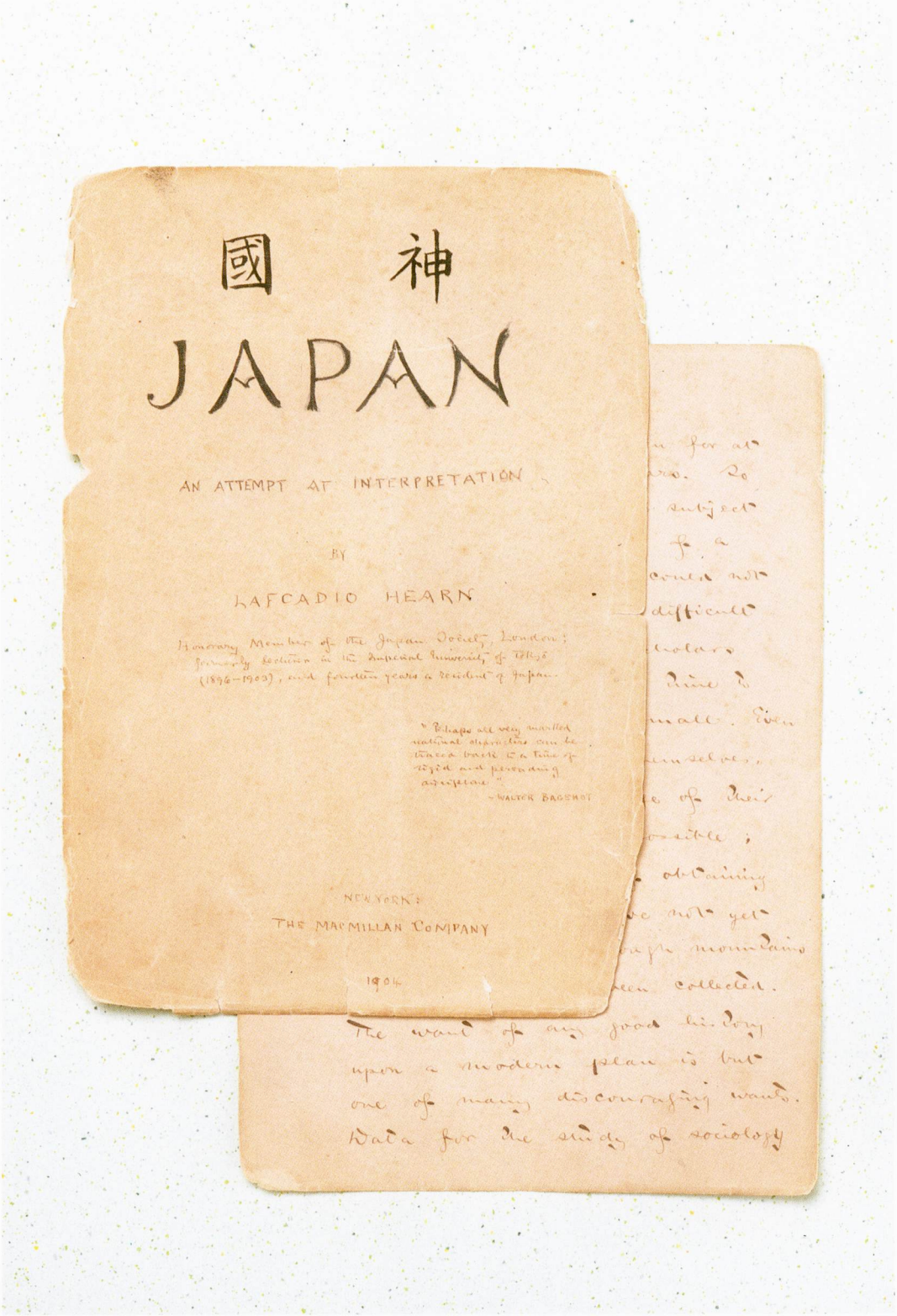
富山大学附属図書館所蔵

ヘルン文庫

Lafcadio Hearn (1850～1904)

小　泉　八　雲

ハーン直筆の原稿「神国日本」



國　神

JAPAN

AN ATTEMPT AT INTERPRETATION

BY

LAFCADIO HEARN

Honorary Member of the Japan Society, London; formerly Lecturer in the Imperial University of Tokyo (1896–1903), and fourteen years a resident of Japan.

"Perhaps all very manifest national characters can be traced back to a time of rigid and persuasive discipline."
—WALTER BAGEHOT

NEW YORK:
THE MACMILLAN COMPANY
1904

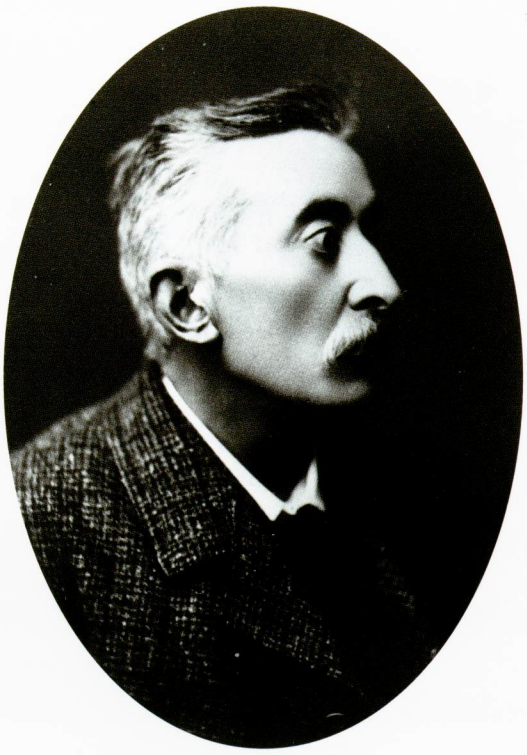
ヘルン文庫の由来

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904、日本に帰化して「小泉八雲」と称した）が所蔵していた全蔵書を文庫としたのがヘルン文庫である。なぜこのような文庫が富山大学に存在するのであろうか。

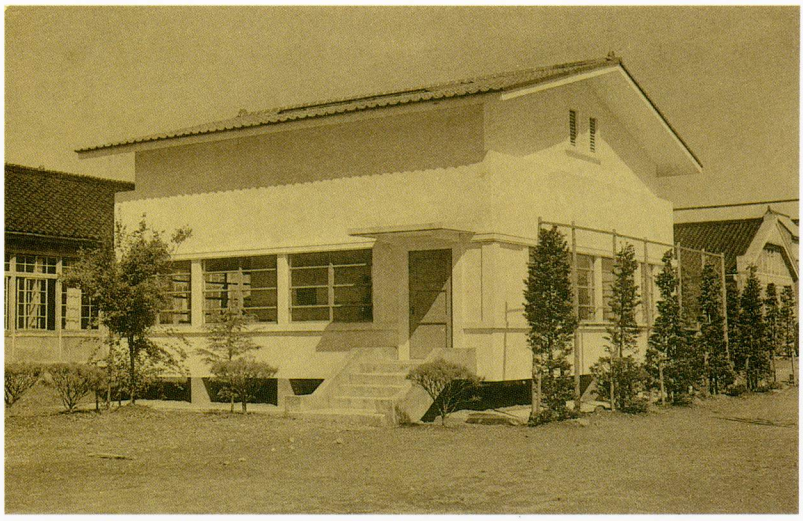
それはハーン亡き後、蔵書は小泉家で保存され研究者に利用されていたが、関東大震災で貴重な文献が多く失われ、小泉家でも危惧を感じてこれらの蔵書をどこか一括して保管できる大学へ譲渡してもよいという意向があった。

ハーンが亡くなってから、「小泉八雲全集」の出版などで小泉セツ夫人の助力をしていたハーンの研究家の田部隆次氏（女子学習院教授・ハーンの高弟）から意向を聞いた南日恒太郎氏（本学の人文学部、理学部の前身である旧制富山高等学校の初代校長、田部氏の実兄）は、新設の富山高等学校へ全国から研究者を集めるには最も相応しい蔵書であると、田部氏に譲渡を依頼した。

購入資金については、富山市東岩瀬の素封家「馬場はる子」氏（旧制富山高等学校創設のための資金を富山県に寄付された家）に懇請され、同校の開校記念に馬場家が小泉家から買い取り寄贈されたものである。



文庫を寄贈された「馬場はる子」氏像



馬場家の寄贈によって建てられた旧制富山高等学校の「ヘルン文庫」

なぜヘルン文庫と呼ぶか

ハーンがアメリカより来日し、英語教師として最初に赴任した島根県松江市では、「ハーン」の発音が「ヘルン」に近かったらしく、学校関係者が「ヘルン先生」と呼び、妻のセツさんも「ヘルンさん」と呼んでいた。

また、ハーンの家紋の「あおさぎ」が英語の[Heron]と発音が類似していること、文庫の蔵書には「へるん」の刻印があることから、本学も「ヘルン文庫」と名付けた。

小泉家の家紋

ハーンの生涯

ハーンは1850年にギリシャのレフカダ島で生まれた。父は駐留中のイギリス軍医、母はギリシャ人であった。幼少のとき父母は離婚し、父の故郷のアイルランド育ったが、父も病死して7才から大叔母に育てられた。イギリス、フランスの宗教学校で学んだが、遊戯中に怪我で左眼を失明した。ハーンの写真には、右側から撮った写真が多いのはこのためだろうか。大叔母の破産で支えを失い、流浪のすえ知人を頼ってアメリカに渡った。辛苦の末ジャーナリトとして、シンシナティ、ニューオリンズで著名となった。フランス文学の翻訳、文芸批評、書評などを新聞、雑誌に寄稿し、また自著も出版した。

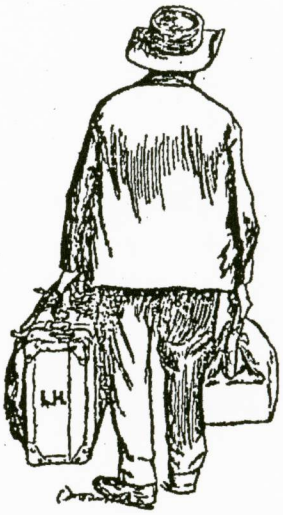
生誕地（ギリシャ・レフカダ島）

ハーンの記念碑（レフカダ島）

日本へ

ニューオリンズで開催された万国博覧会の東洋関係コーナに関心を持ち、日本コーナで服部一三氏と知り合った。

後に出版社から依頼の紀行文を書くため、1890年（ハーン40才）は挿絵画家と日本にやって来た。しかし原稿料等が挿絵画家より下で屈辱的だったので、出版社との契約を破棄してしまった。



「1890年3月　日本へ向けて出発」

松江時代

ハーンの旧居（松江市）

ところが生活に困窮し、東京帝大のチェンバレン教授や文部省の服部一三氏の世話で松江中学の英語の教師となった。当時の松江、出雲は日本文化の発祥の地であり、まだ明治の西洋文化の影響を受けていないところであった。「知られぬ日本の面影」「日本瞥見記」などにも描かれている。家政婦としてヘルンの世話をしたのが「小泉セツ」であった。松江の冬は寒く、再び冬を迎えることを嫌ったハーンは、チェンバレン教授の世話で熊本高等学校へ移った。

熊本、神戸時代

このときハーンはセツと結婚し、長男が誕生している。熊本はハーンに合わなかったのか、3年後には神戸へ移り、英字新聞（神戸クロニクル）の記者となった。家族のことを悩んだハーンは日本に帰化し、日本名を「小泉八雲」とした。

熊本では、ハーンの日本で初めての著書「知られぬ日本の面影」を出版し、神戸へ移ってからは文筆活動も進み、「東の国から」「心」などを書いている。1896年に東京帝大から「英語英文学」の外人講師に招かれ、一家は東京へ移転した。

東京時代

大学の授業とともに文筆活動も盛んで、「仏の畑の落ち穂」「異国情趣と回顧」「影」「骨董」「怪談」など出版している。

東京帝大には7年在籍した。その間に次男、三男が誕生した。ハーンはやがてアメリカへ帰ることを望み、長男には幼いころから英語教育をした。それに使われたテキストが文庫にあり、ヘルン自筆の書き込みがある。

ニューオリンズの新聞記者時代から親交があり、ヘルン伝記作家でもあるエイザベス・ビスランド（ウエットモア夫人）が、コーネル大学でハーンの講演を企画したがヘルンの健康がすぐれず、取り止めになった。1903年の夏、長女が生まれ、ハーンが抱いていた祖国へ帰る思いは捨てねばならなかった。1904年4月から早稲田大学から英文学の講師として招かれた。

ハーンの家族（東京西大久保の自宅にて）

「神国日本」の原稿の仕上げと出版ゲラ読みを行っていたが、残念なことにこの出版をみることなく、9月26日に心臓発作で亡くなった。享年54才であった。9月30日に仏式で葬儀が行われ、墓は雑司ケ谷の墓地に建てられた。法名は「正覚院浄華八雲居士」、折しも日露戦争の最中であった。

11年後の大正4年、ハーンに従四位を送られた。文人としてのハーンの功労が日本政府によってここに時初めて、正式に認められたのであった。

文庫の内容

文庫は洋書2,069 冊、和漢書364 冊および「神国日本」の手書き原稿1,200 枚、合せて2,435 冊からなっている。洋書のうち、1,350 冊が英語、719 冊がフランス語の図書である。

- ２，４３５冊
  - 洋　書　２，０６９冊
    - 英　語　本　　１，３５０冊
    - フランス語本　　７１９冊
  - 和漢書　　３６４冊
  - 神国日本　手書き原稿　１，２００枚　　２冊

蔵書には印が押してあるが、英字のものと日本字のものと二通りある。1927年に文庫を整理して作られた「Catalogue of the Lafcadio Hearn Library 」では、英字の蔵書印が押してある図書のタイトルに「＊」をつけて区別してある。

この「＊」がついているものは、ハーンがニューオリンズ時代、忙しいにもかかわらず毎日２時間かけて古本あさりをしたという努力の結果の収穫とみられる図書である。

「へるん」という平がなの蔵書印を押してあるものは、前記英文カタログでは「無じるし」になっていて、これらは日本で入手された図書と思われる。

ニューオリンズ時代に入手したものは、英語の図書195冊、フランス語の図書358冊である。つまり英語の図書は７分の１、フランス語の図書は２分の１がアメリカ時代に購入したものである。

神国日本の直筆原稿とその刊本

蔵書の内容については、前記の目録が用意されているので、興味のある方は手にとってみてほしい。

ヘルンが日本に興味を示した図書として、Arnold, Sir Edwin-The light of Asia. Chambalain, B.H.-A translation of "Ko-ji-ki"（古事記）と Things Japanese. Lowell, Percival-The soul of the Far East.が収められている。

また、和漢書類はセツ夫人の説明を通してハーンの文学的作品の資料となったもので、帝国文庫38冊、百物語類が7種、耳なし芳一の原本ともなった「臥遊奇談」5冊や仏教関係書など、大半は木版刷の和装本である。

その外、ハーンがその子息に英語を教えるために使ったと思われるボールドウィン読本8冊のうち4冊や、マクミラン社新文学読本10冊のうち5冊などには、ハーン自筆の片カナの日本語の書き入れがあって、ヘルンをしのぶ縁として感慨深いものがある。

ハーンの怪談の底本となった百物語類

むすび

ハーンの書いた「耳なし芳一」や「雪女」などの怪談はあまりにも有名で、ミステリー作家と誤解されがちですが、怪談の作品は一部で、本当は文学者として、文芸評論家として、民俗学者として随筆、紀行文、文芸批評、民族学、翻訳（主としてフランス文学の英訳）などの著書が多数ある。また、東京帝大では「英語・英文学」の講義を担当し、英文学史、詩論などの著書もある。

かって外国、特にアメリカでは日本を研究する上で、ハーンは欠かせない人であり「神国日本」がマクミラン社から出版されると、海軍士官学校では必読書となった。太平洋戦争中は、ベネチクトの「菊と刀」とならんで、日本を理解する上で重要であった。昭和55年に、アメリカのマンスフィールド大使夫妻が日本に赴任されて、真先にヘルン文庫を訪れられたのも、ハーンによって日本を理解されたからであろう。

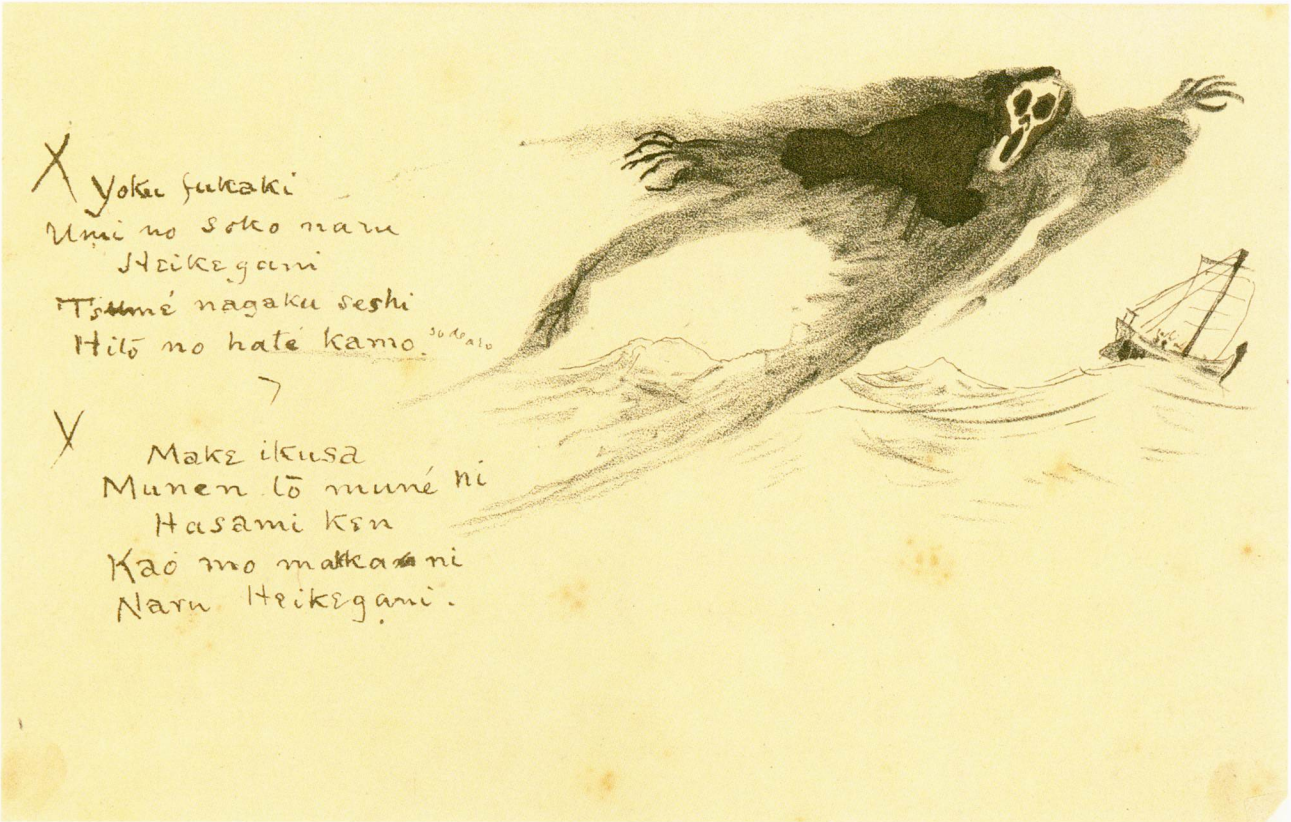
ハーンは明治の日本を紹介し、その内容は古い時代の日本であるかもしれないが、日本民族、日本人の精神は現在も将来もそう変わらないと思われる。外国で日本を知るためにハーンの研究が行われており、日本人が日本を研究するにもハーンは欠かせない人である。わがヘルン文庫の意義は、こういうところにあるのでないだろうか。

小泉八雲年表

西暦	年号	ハーン年齢	事項
1850	嘉永3		6月27日ギリシャのレフカダに生まれた。当時父32才、母27才。父はその後西インドへ赴任。
1851	〃 4	1	7月母とともにアイルランドへ帰る。
1853	〃 6	3	父は病気のため西インドから帰る。
1854	安政1	4	父クリミヤに向う。弟ジェームズ生まれる。母はギリシャへ帰る。
1856	〃 3	6	7月父クリミヤから帰る。父母離婚、大叔母ブリネーン(Brenane)夫人に養われる。
1857	〃 4	7	父は再婚して8月インドへ赴任。
1861	文久2	12	この頃ヘルンはフランスのイブトー(Yvetot)(?) 学校に在学。
1862	〃 3	13	ブリネーン夫人イギリスへ移住。9月イギリスのアショー(Ushaw) 学校に入学。
1863	慶応2	16	学校で遊戯中に事故のため左眼失明。11月父は帰国の途中スエズで死亡。
1866	〃 3	17	大叔母ブリネーン夫人破産のため10月アショー学校退学。
1868	明治元	18	ロンドンで放浪生活。
1869	〃 2	19	独立を求めてアメリカへ渡り、ニューヨーク着。
1874	〃 7	24	シンシナチー・エンクワイラー(Cincinnati Enquirer) 新聞の記者となる。6月21日、日曜新聞イー・ジグランプス(Ye Giglampz)を発行して9号までつづける。
1875	〃 8	25	マッティー・フォーリー(Mattie Foley)という混血女性との短い結婚生活。
1876	〃 9	26	シンシナチー・コマーシャル(Cincinnati Commercial)へ新聞へ移る。
1877	〃 10	27	10月シンシナティーを去って、11月12日ニュー・オーリーンズ(New Orleans) に到着。
1878	〃 11	28	6月15日ニュー・オーリーンズ・シチー・アイテム(New Orleans City Item)の記者となり、後副主筆となる。
1879	〃 12	29	3月小料理店開業。すぐ廃業。
1881	〃 14	31	12月4日タイルズ・デモクラット(Times-Democrat) 社に変り、その文学部長となる。
1882	〃 15	32	1月翻訳「クレオパトラの一夜、その他」(One of Cleopatra's nights and other fantasic romances) 出版。12月15日テルンの母ローザはギリシャで死去、59才。
1884	〃 17	34	「異文学遺聞」(Stray leaves from strange literature)を出版。
1885	〃 18	35	「ゴンボー・ゼベス」(Gombo Zhebes)、「クレオール料理法」(La cuisine Creole)、「ニュー・オーリーンズ 案内記」(The historical sketch-book and guide to New Orleans) 出版。
1887	〃 20	37	「シナ 怪談」(Some Chinese ghosts)出版。6月ニュー・オーリーンズを去り10月西インドのマルチニーク(Martinique)島に行く。
1889	〃 22	39	5月ニューヨークに帰る。「チタ」(Chita) 出版。
1890	〃 23	40	「ユーマ」(Youma)、「フランス領西インドの二年間」(Two years in the French West Indies)、翻訳「シルベスト・ボナールの罪 The crimeof Sylvestre Bonnard) 出版。3月5日ニューヨーク出発。3月17日バンクーバー(Vancouver) 出発。4月

西暦	年　号	ハーン年　齢	事　　項
			4日横浜着。8月30日松江中学校へ着任。12月2日小泉セツと結婚。(田部隆次著「小泉八雲」昭26年改訂再版による。)
1891	明治24	41	11月5日松江出発、熊本第五高等学校へ転任。
1893	〃 26	43	長男一雄生まれる。
1894	〃 27	44	「知られぬ日本の面影」(Glimpses of unfamiliar Japan)出版11月熊本を辞し、神戸の「ジャパン・クロニクル」(The Japan Chronicle)記者となる。
1895	〃 28	45	「東の国より」(out of the East) 出版。日本に帰化して小泉八雲と名乗る。
1896	〃 29	46	「心」(Kokoro)出版。8月20日神戸を立って上京、東京帝大文学部講師となる。
1897	〃 30	47	「仏土の落穂」(Gleanings from Buddha-fields)出版。二男巌生れる。
1898	〃 31	49	「異国情趣と回顧」(Exotics and retrospectives)出版。
1899	〃 32	49	「霊の日本」(In ghostly Japan)出版。三男清生まれる。
1900	〃 33	50	「影」(Shadowings)出版。
1901	〃 34	51	「日本雑録」(A Japanese miscellany) 出版。
1902	〃 35	52	「日本おとぎ話」(Japanese fairy tales)、「骨董」(Kotto) 出版。
1903	〃 36	53	3月東京帝大講師を辞める。長女すず子生れる。
1904	〃 37	54	4月から早稲田大学文学部講師となる。 9月26日心臓病で死去。 「怪談」(Kwaidan)、「神国日本」(Japan : an attempt at interpretation)出版。

ちりめん本として出版された日本おとぎ話集「化け蜘蛛」「猫を描いた少年」「だんごをなくしたおばあさん」「ちんちん小袴」「若がえりの泉」の5冊



ハーンの書いたイラスト（船幽霊）妖魔詩話より

ヘルン文庫を訪れられたマンスフィールド駐日米国大使夫妻（昭和55年）